

地域情報（県別）

【埼玉】完全24時間365日対応の無痛分娩、年間700～800件の取扱-檜垣博・かわぐちレディースクリニック院長に聞く◆Vol.1

愛育病院で産婦人科医として働きながら麻酔科標榜医を取得

m3.com地域版

医療法人社団紡世会かわぐちレディースクリニック（川口市）は、完全24時間365日の無痛分娩体制を構築し、家族立ち会い帝王切開にも取り組む。「ここなら安心できる」と感じてもらえる体制づくりに重点をおき、昼夜を問わず十分なスタッフを配置し、医師や助産師・看護師の有資格者だけでなく分娩に携わるチームとして看護助手を含めて、全員が実践的なトレーニングを積んでいる。同クリニックの概要、無痛分娩や家族立ち会い帝王切開の取り組みについて同氏に聞いた。（2026年2月24日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)（近日公開）



檜垣博氏

助産師は20代から60代まで幅広い年齢層

——クリニックの概要や診療体制を教えてください。

当院は、JR京浜東北線蕨駅と川口駅の間に位置する川口市南前川の住宅街にあります。周辺には公園や学校、商業施設もそろそろ落ち着いたエリアです。産科、婦人科のほか、産後ケアを行う「マタニティケアホームつむぎ」を併設し、妊娠から出産、産後までを一貫して支える体制を整えています。

現在の人員体制は、産婦人科医（常勤10人、非常勤17人）、麻酔科医（非常勤7人）、新生児科医（常勤1人、非常勤1人）、助産師（常勤33人、非常勤2人）、看護師（常勤5人、非常勤1人）、薬剤師・常勤1人、臨床検査技師・常勤2人、その他多数のスタッフが在籍しています。多くのスタッフが在籍している理由の一つは、「ここなら安心できる」と感じていただけることを重視しているからです。それは、日々の備えによって支えられるものだと考えています。

そのため、院内で継続的に研修を行える体制を整えています。例えば、母体救命に対応するJ-CIMELS、周産期救急対応を学ぶALSO、新生児蘇生法のNCPRなどへの研修受講を支援し、院内にはインストラクター資格を持つスタッフ

も複数在籍しています。外部研修に依存せず、院内で質の高いトレーニングを繰り返し実施できる仕組みを構築することで、スタッフ全体の対応力を養っています。

スタッフ構成で特徴的なのは、助産師の層の厚さです。20代から60代まで幅広い年齢層のスタッフを採用し、世代が重なるピラミッド型の構成を意識しています。ベテランが若い世代を指導・育成する循環構造が生まれています。また、各シフトに十分な助産師や看護師を配置し、複数のお産が同時に進んだ場合でも、マンツーマンに近い形で、妊婦さん一人一人に寄り添うことができます。

また、当院の組織運営はトップダウン型ではなく、各部署がフラットに連携する「ドーナツ型」を意識しています。私たちの施設内では全ての職種が同格です。例えば、お食事をお持ちした配膳スタッフが「患者さんが授乳にお悩みのようだ」と気づけば、すぐに助産師が反応して授乳指導に向かいます。医療以外の場面でも、病室に最も頻繁に出入りするクリーンスタッフが設備の不具合に気づいた際には、事務部が即座に修繕を手配します。こうした職種を越えた密なコミュニケーションと迅速な対応が、結果として当院の高い患者満足度につながっています。



クリニックの外観

——患者数や患者の傾向を教えてください。

1日当たりの外来患者数は180人ほどです。川口市を中心に、さいたま市、蕨市、戸田市からも多くの方が来院しています。

当院では完全24時間365日、無痛分娩ができる体制を整えています。年間約1400件の新しい命の誕生に寄り添っていますが、約半数に当たる700～800件で無痛分娩が選ばれています。川口市は都心へも通いやすく、お仕事をされている妊婦さんが多い地域です。そのため、出産時の体力消耗をできるだけ抑え、産後の生活や職場復帰に備えたい、といったご要望が増えていると感じます。



無痛分娩は当初15%から現在は約75%

——完全24時間365日無痛分娩に踏み切られた背景や狙いをお聞かせください。

医師3年目の2004年に赴任した愛育病院（東京都港区）で、初めて無痛分娩に立ち会いました。それまで「お産は痛いもの」と思い込んでいましたが、痛みが和らぐことで、出産がこんなにも穏やかで前向きな時間になるのかと衝撃を受けました。そして、「痛みを和らげることは、出産を幸せな体験にするのだ」と実感したのです。

前職の医局では、「必ず二つ目の専門性を持ちなさい」という方針がありました。同僚の多くが周産期専門医や超音波専門医を目指す中、私が選んだのは麻酔科でした。当時、日本ではまだ無痛分娩が普及しておらず、そこに大きな可能性を感じていたからです。以前は、麻酔科標榜医を取得するには一時的に麻酔科へ転科するのが一般的であり、産婦人科医として働きながら目指す道は決して容易ではありませんでした。その壁に直面し、上席の安達知子先生にご相談したところ、産婦人科に籍を置いたまま麻酔科の研修を受けられる仕組みを整えてくださいました。

前職でいただいたこのご恩と経験を次世代へつなぐため、現在、私の施設でも同様の制度を設けています。希望する産婦人科医が週に1回麻酔科研修に向けるようにし、産婦人科医としてのキャリアを中断することなく麻酔科標榜医を取得できる環境を整えています。

かつての川口市には、無痛分娩を選択できる施設がなかったため、当院の開院により、地域における出産の選択肢を増やすきっかけになったと考えています。私たちが届けたいのは「無痛分娩を前提としたお産」ではなく、「妊娠中の安心感」です。いつ始まるかわからないお産でも、いつでも穏やかな気持ちで過ごしていただくため、「完全24時間365日無痛分娩」に対応できる体制を整えています。24時間365日をうたう医療機関でも、「医師がいればできるが、いなければできない」という条件が付くことがあります。当院はそうした事情は関係なく、24時間365日無痛ができるため「完全」をうたっています。そのためにも医師・助産師・看護師を十分に配置し、月1回以上、全スタッフ参加の緊急対応シミュレーションを実施するなど、予期せぬ事態にもチームで落ち着いて対応できるよう備えています。

——無痛分娩を選択する人が増加したそうですね。

20年前、私が愛育病院にいた頃、日本人同士のカップルで無痛分娩を選択される方はおよそ7%でした。それが現在、同施設では約90%にまで増えています。そして当院でも開院当初の選択率は15%ほどでしたが、現在は約75%へと増えています。この20年でお産に対する価値観や、妊婦さんが求めるものが変化してきたことが影響していると感じます。

無痛分娩の価値は、単に痛みを和らげることだけではありません。陣痛の合間に休息でき、お産による体力の消耗を抑え、身体的、精神的ダメージを軽減できます。そうしたメリットは、産後の回復をスムーズにし、笑顔で育児をスタートすることにもつながります。また、痛みに気を取られずに過ごせることで、「陣痛から出産までを、はっきりとした幸せな記憶として残せた」と話してくださる方も少なくありません。

当院では、事前の動画や説明を通じて、メリットだけでなくリスクについても丁寧にお伝えしています。十分に理解し、納得した上で選んでいただく。その積み重ねを大切にしてきたことが、現在の選択率につながっているのだと考えています。

帝王切開術後早期回復プログラム（ERAC）を導入

——「家族立ち会い帝王切開」を導入したきっかけを教えてください。

きっかけは、私の体験にあります。2004年に妻の帝王切開に立ち会い、手術室で新しい命が産声をあげる瞬間を妻とともに迎えたことは、今も忘れられない経験です。その時、「帝王切開もまた、経膈分娩と同じように家族で感動を分かち合える幸せなお産だ」と心から感じました。その思いが原点にあり、私が施設管理者に就任した2020年以

降、当院では帝王切開でも家族の立ち会いを基本としており、現在ではほとんどの方が希望しています。第一子の出産では帝王切開で立ち会いができなかったため、次は立ち会いたいと当院を選んで来られる方もいらっしゃいます。

家族立ち会い帝王切開を安全に実現するには、手術中の不安を和らげる細やかな麻酔管理が必要です。また、手術室という特別な空間でご家族が緊張されないよう、リラックスできる音楽を流し、手術の様子が直接見えないようご案内の動線を工夫するなど、ご家族の絆が深まるかけがえのない一日となるよう、細やかな心遣いを大切にしています。

ご夫婦と一緒に赤ちゃんの産声を聞くことで、父親としての実感が芽生え、温かな子育てへとつなげてほしい。帝王切開に不安を抱くお母さんにも、「このお産で良かった」と笑顔で振り返っていただきたいと願っています。

また、お母さんが少しでも早く体力を回復し、笑顔で育児をスタートされるよう、「帝王切開術後早期回復プログラム（ERAC）」を導入しています。これは、「手術後は痛くて動けない」「ずっと絶食」といった従来のイメージを変える、医学的根拠に基づいた新しいケアの形です。2025年の改訂版から、術中の項目に、家族立ち会い帝王切開が推奨となりました。私がこれまで伝えてきた考え方が位置付けられたことを、とてもうれしく感じています。

家族立ち会い帝王切開の導入は、決して難しいものではありません。手術室の動線やオペレーションを見直すといった仕組みの改善が比較的スムーズに行えるため、小回りの利く個人施設には非常に適した取り組みだと言えます。家族立ち会い帝王切開をより多くの現場に広げたいと考え、各地で講演やお話をさせていただいています。いつでもお声をかけてください。

◆槍垣 博（ひがき・ひろし）氏

2002年、帝京大学医学部卒業。同大学医学部附属病院 産婦人科勤務。2004年から総合母子保健センター愛育病院産婦人科で長年研鑽を積み、蕨市立病院産婦人科で地域医療に従事。麻酔科医としても、埼玉大学国際医療センター 麻酔科、総合母子医療センター愛育病院などを歴任。2020年4月より「かわぐちレディースクリニック」を開院し、現職。愛育病院麻酔科非常勤。日本専門医機構認定産婦人科専門医。麻酔科標榜医。母体保護法指定医。東都大学臨床教授。埼玉県産婦人科医会理事。NCPR（新生児蘇生法）インストラクター。J-MELS（母体救命）インストラクター。

【取材・文＝神田未和（写真はクリニック提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

